話の仕方

尺秀三郎

人に話をなす所謂自分の思想を人に述へるには色々の仕方があります。即ち、やつと其事柄か分る位にすることも出來、又後まで記憶することが出來得る樣にすることも出來、又明瞭にも、ぼんやりにもすることか出來ます。今私は多人數に向て話をするには、どういふ風にしたらよいかといふことを話して見ませう。斯樣の事を申しますと私か度々立派な演説でもして、十分な經驗があるであろうと思ひなさるかも知れませんが、左樣ではありません。寧ろ私は度々失敗しましたから、そこで次の樣な事に氣を付けて行つたら、先づよからうと考へました。

第一、發音を正すこと、
第二、話に用ゐる言葉、
第三、話をする音の調子及話の調子、
第四、話をする態度、

第一、發音は明瞭で、如何なる音でも發音し得る樣にして置かなければなりません。日本の音は五十音から出來て居るが、この五十音さへも正しく發音することの出來ぬのは實に殘念である、一体日本人は發音といふことには注意して居らぬ、私は嘗て會津で教育の講習會を開いた時に、和學者の清水某といふ六十斗りの老人が毎日熱心に質問に來る。此人或時「日本には五十音があつて、これで話をするから五十音を巧に話す樣に研究して置けば夫でよろしい」といひましたから、私はいうた、「西洋の害を讀むと五十音の外に澤山音か

ある」、處が先生は「人の音は五十音で他の音は獸の音である」と言はれた、此人の考では五十音の外音なしといふのである。斯樣な有樣であるから、日本人は發音に氣を付けない。私は獨逸に居た時に、先生達はR、Lの音を言うて呉れるが、私には其れが聞けぬ、これは私に其れを聞き分ける耳がないからである。即ち幼少の時分から簡易な音ばかり聞いて居るから、其れが習慣になつて居るからである、故に私は、これはどうしても幼稚園に居る時から、幼兒の耳を練習して置かなければならぬと思ふ。私は外國語學校に居る或る教師が「私は骨折つて生徒を教へるが、生徒は一向私の思ふ通りにならぬ、故に幼稚園に外國の教師を置いて教へなければならぬ」と言うたのを聞いたが、實に左樣である。幼少の時に練習しなければ耳の機關でも、舌の運動でも、簡單な音を聞いたり發したりすることになれてしまふから困まる、現にクインテリアンの如きは、其親が乳母にラテン語を正しく話すことの出來るものを附けて置いて、幼少の時にラテン語の練習をさせた。またバーワドーは、其娘か四才の時に佛國に往つた。そうして歸つて來た時に、其娘は佛語てオカヘリナサイというた、故にバーワドーは大にこれに感じたといふ事である、これは佛語の先生が骨折つて其幼い娘に教へたのである、一体獨逸人には佛國の音はよく出ないといふが左樣でない、幼少の時からすれは出來る。私は先日或る獨逸の教師が語學を教授して居る處を見た。先生は顏を眞赤にして切りに生徒(別科生)に話して居つた。私を見るや否や言うた、「何卒通辯してくれ、此の人達は舌でい

ふからいけない、唇で話す樣にいふても少しも分らぬ」一体日本人は上調子で話す癖がある。大坂邊の語にアリマスといふ語をアリマといふスは省いて居るのではない、言ふて居るけれとも能く分らぬ、聞えないのである。又東京ではヒをシし誤る、故に甚しいのはシホシ（汐干）シック ヨヒツネ（義經）なといふ。又越後邊ではイをエと誤る故にエッテモ（何時デモ）エチ（一）だなど云ふことがある、此等は皆幼兒の時の發音の練習の注意が足りないからである。故に幼少の時には發音を練習することが大切である。そうでないと折角語をしても意の通らぬことが度々ある。

第二は、發音が正しくなつたら、次には一つ進んて其話に用ゐる言葉を擇むことが必要である。同し語でも高尚なのも、野鄙なのも、いきなも、野暮なのも色々ある。即ち古るめかしい語を用ゐると高尚である。一体語が高尚だの野鄙だのといふのは高尚な人が用ゐる語は自ら高尚に聞え、野鄙な人の用ゐる語は野鄙に聞えるのである。又漢語とか洋語とかいふ樣に學問のある人の用ゐる語は高尚に聞える。又常に用ゐない語は高尚に聞える。例令ば奥樣といふ語などは、今では始終、臺所で働いて居る樣な人でも皆奥樣といふ樣になつて餘り用ゐ過た爲に高尚の度が大に減して來た樣に思はれる。即ち一般に用ゐられる語は野鄙に聞えるが、稀に用ゐられる語は高尚に聞える、されぼといつて一般の人の用ゐない自分勝手に作つた語は無益である。人に分らないからです。併し今日では普通の人のつかはぬ洋語漢語古語などをつかふと其演說が如何にもうまいやうに思うて居る人が

多いやうです。

次には適當な詞をつかふことが必要です。そうでないとあまり形容しすぎて滑稽になることなどがあります。たとへば It is very hot と言ひますが hot は沸騰ですから暑さを言ふのにはあまり大層です。之は Warm と言つた方がよろしいでせう。又腰の細いのを形容して柳のやうなと言ふのはまだしもですが若し形容に過ぎて針のやうなと言つたら餘程をかしいでせう。

又同じ詞でも、奇麗なのと汚いのとがある、たとへば眉毛の形容などは實際からいふと三日月のやうなとも又毛虫のやうなとも言はれるが、毛虫のやうなと言ふと何だか汚ないやうな氣がして美人の形容などには頗る不適當になる。こういふ風にきたない不適當な詞をつかふと其詞をさらうやうな心持になる。我子を豚兒といひますが、之をやはらかくぶたのこと言つたらどうでせう。我子を豚とはあまりひどいではありませんか。之等は何とか外に言ひやうのあるものと思ひます。よく氣をつけなければ、あまり謙遜しすぎて、汚ない語をつかふやうになります。

又一の物事を形容するにもいろ〳〵の詞があるといふことを知らなければなりません。たとへば同じ奥様の事を言ふにも、貴夫人、令閨、奥様、山の神、荒神といふ風にいろ〳〵ありまして、此一の詞を多くの程度につかひわけるといふことは、是非知らなければなりません。

要するに話に用ゐる詞は高尚で、適當で、意味の面白い、きれいな、のであつて、之を又いろいろの程度につかひわけるといふことが必要です。

第三、音の調子はきれいなのがよろしい。美音を出すのは天性にも因りますが、練習といふことも大ほど助けます。美音の練習には、いろ〳〵の音樂たとへば謠曲とか、一中節とかいふ風に種々けいこをするのがよろしいのです。それはいろいろの音樂を習ふほどいろ〳〵の音を出すことが出來る樣になります。

音の調子よりも話の調子は寧ろ改良しやすいものです。同じく皆樣といふ詞でも、言ひ方に由りては其話をきゝたくもなり又きゝたくなくもなるものです。要するに話の調子は流暢でなければなりません。それは耳に適當の休息を與へて、のべつにつゝかゝらぬやうにするのです。そうして緩急度を得るやうにすることが必要です。

第四、話をする態度即ち話しぶりは大ほど大事のことです。之にはいろ〳〵の癖がありまして床をながめながら言ふ人、天井を見る人、手を氣にする人などあります。之等は皆よろしくない癖で必ず常に聽いて居る人に十分の注意を與ふることが必要です。そうして絶えず聽く人の樣子を見て居らなければなりません。そうすると聽く人も自然に話す人と一緒に熱心になるものです。

話をする完全な態度としては、私は話すわけには參りませんが、とにかく熱心な時には体を前に出すといふやうな事は必要です。又手をつかひ、手まねをすること、体を樂に持つて人をしてくたびれたであらうと思はしめぬことなどは必要な事であります。之等の態度を研究するには、オペラなどに行て度々見物することが必要です。

そこで以上の事がそろひましても尙話の組み立

の全体がよくなくてはいけません。即ち主意が貫通して居る事、聽く人が之を基として聞いて理解することが必要です。併し筋の間に枝を加へ、いろどりをし、變化を與ふることも最も必要な事です、之には例を與ふることが最もよろしいので、其例は又分りやすくて併かも高尚でなければなりません。何故かといふと六かしい例には又々説明がいりますからつまり普通の人によく分るのを擧げるのがよろしいといふ事になる。たとへば忠臣の例をとるのに極めて狹い自分の藩なんかのを言ふよりは、寧ろ楠正成をとつた方が、誰にもはや分りがします。

又話の品格にも注意しなければなりません。夫は必ず高尚なものであるべきです。凡て德義、國家、政治などに關するものは皆高尚なものですから、之等をよく組立てゝ話すことが必要です。

（完）

英吉利の博物館で、クロンエルの頭骸骨を見て

「ハアー、小さな頭だつたんだなー」

といふと、案内人は澄まし込んで、

「夫は、クロンエルの小供の時の頭なんです」